

Sasha Waltz & Guests

サシャ・ヴァルツ&ゲスト
Körper ケルパー (身体)

ポスト・ピナ・バウシュの代表作に注目

ダンスと演劇を融合させ、ダンス界に衝撃を与えたピナ・バウシュ。

以後、ダンス界は多大な影響からいかに脱却し、新しいダンスを構築するか模索して来たが、今、ポスト・ピナ・バウシュとして注目を浴びているのがサシャ・ヴァルツだ。

ヴァルツが目指したのは、ダンスの本質とも言える身体の可能性に立ち返ること。

『Körper ケルパー (身体)』は、まさにその代表作と言える作品。

ダンサーたちの身体を極限にまで解体し、再構築することで、鮮やかに現代社会に生きる人々の潜在意識を切り取ってみせた。

© Bernd Uhlig



「ケルパー」とは、日本語では身体という意味。これは、身体にできる可能な限りのあれやこれやの動きや状態を、魅惑的にも怪物みたいに恐ろしくもなれる身体を、日常とは違った視点から見せてくれるスペクタクルである。

舞台上、壁の前に13人のダンサーが登場、身体と身体が滑り合ったり、うごめいたりしつつ重なり合う。それはあたかも巨大な生きた宗教画のごとき光景にも見える。身体が徐々に変形すると個々のアイデンティティも徐々に消滅してしまう。肉体という物質は正気を失って何か別な生き物になってゆく。

『Körper ケルパー (身体)』を振付けたサシャ・ヴァルツは言う。「私の振付は身体に無理なことを課しているのではと見られがちです。ダンサーに身体能力ギリギリのことを要求するのは、テーマやメッセージを観客にちゃんと伝えるためです。はっきりと見える

ようにやらないと伝わらないことがあります。また、日常では隠れて見えないものをみせてゆくことにもなります」

そこまでヴァルツを駆り立て、観客に伝えたいメッセージとは一体何なのだろうか。

「人々は言葉以外のところでも人間というもの、社会というものを理解したいという強い欲求を持っているものなのです。今の社会は<存在>の全体性など気かけず、美容整形、クローン研究、遺伝子配合など身体を個々ばらばらに解体して、コラージュしているでしょう……」

超絶な技巧を駆使し、ダンサーの身体を解体し、新たな生き物として舞台上で再構築してみせる……。『Körper ケルパー (身体)』は、現代社会の奥に隠された人々の意識を投影し、ハイブリッドな生き物を生産する場所とも言えるのかもしれない。

P R O F I L E

サシャ・ヴァルツ

1963年カールスルーエ(ドイツ)生まれ。アムステルダムとニューヨークでダンスと振付を学ぶ。1993年にサシャ・ヴァルツ&ゲストを結成。1999年から2004年までシャウビューネ劇場(ベルリン)のアーティスト・ディレクション・コミッティーの一員を務め、『Körper ケルパー (身体)』、『S』、『noBody』の3部作を創作。高い評価を受ける。サシャ・ヴァルツ&ゲストは、2004年には再び独立したカンパニーとなり、旺盛な活動を続けている。



© Andre Rival

サシャ・ヴァルツ&ゲスト

『Körper ケルパー (身体)』

ピナ・バウシュに次ぐ世代を代表するドイツの振付家サシャ・ヴァルツが、ベルリンのシャウビューネ劇場の芸術監督時代に制作した代表作『Körper』。『S』、『noBody』と続く『身体』三部作の第一目として世界的な評価を確立した作品の待望の上演です。

【日時】7月28日(土) 開演 15:00

7月29日(日) 開演 15:00

※28日の公演終了後、振付家によるトークを行います。

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【演目】『Körper ケルパー (身体)』(2000年初演) 【演出・振付】サシャ・ヴァルツ

【チケット(税込)】発売中

S席6,000円 A席4,000円 学生A席2,000円

※8月4日(土)に滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール 中ホールにて公演あり(開演14:00)。

